

<史料紹介>

山口県文書館所蔵アーカイブズガイドー学校教育編（9）ー

山本明史・和田秀作・浅川均・金谷匡人

山口県文書館では、所蔵資料を学校教育現場での活用という観点から捉えなおし、授業で活用しやすい形で提供する取り組みを平成 22 年度から行っている。その成果は、『山口県文書館研究紀要』第 38 号～45 号に掲載した。また利活用の促進を図るため、当館 Web サイトにも PDF の形式でアップロードしている。本稿はその続編である。

当館は、この資料集が文書館と学校教育現場をつなぐ架け橋となることを願っている。授業実践に関し、学校教育現場と情報の共有を図りたいと考えているので、資料の活用方法等について質問があれば、ぜひ当館に問い合わせていただきたい。

- 項目立ては東京書籍の中学校教科書『新しい社会 歴史』に準拠した。本稿のトピックの番号は、前稿からの通番とした。
- 原稿執筆にあたっては、No.196, 199, 201, 203, 209～213 を山本, No.197, 202 を和田, No.198, 200, 204, 206 を金谷, No.205, 207, 208 を浅川が担当した。
- 本稿を含め、現在のトピック数は 213 である。Web サイト上に教科書の項目とトピックとの対照表を掲載しており、各トピックへのリンクを貼っているので、日々の授業づくりにご活用いただきたい。

* Web サイトでは授業で活用し易いように、A4 用紙にそのままの形で出力できるようレイアウトしています。また、画像にはポップアップ機能をつけ、コピー可能な形式でアップロードしています。アーカイブズガイド学校教育編の Web サイトアドレスは <http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/index/page/id/524/>。スマートフォンやタブレット端末の方はこちらの QR コードからアクセスできます。



➤ 当館 Web サイトには、この資料集のほかにも授業づくりに参考となる次のようなコンテンツがあります（いずれもダウンロードして使用することができます）。

*** 山口県文書館アーカイブズガイド ー幕末維新編ー**

- ・幕末維新期の当館所蔵資料を画像入りで紹介しています。

*** WEB 版 明治維新資料室**

- ・当館と山口県立山口図書館が所蔵する明治維新関係資料を紹介しています。

*** アーカイブズウィークの解説シート**

- ・当館では、毎年 6 月に中国四国地区のアーカイブズ機関と連携し、アーカイブズ普及のためのイベントとしてアーカイブズウィークを開催しています。
- ・毎年さまざまな視点からテーマをたて、ユニークな切り口で館蔵資料を紹介しています。これらはテーマ学習の素材として最適です。

【テーマの例】

「文書館レキシノオト ～「音」で読み解く防長の歴史～」(H30)

「防長と海 ～その記録と記憶～」(H29)

「いやす・なおす・たもつ ～文書館資料にみる病気・医療・健康～」(H28)

「文書館動物記 ～書庫に棲む動物たち～」(H27)

*** 古文書講座の解説成果（翻刻）**

- ・当館の古文書実践講座の学習活動として翻刻した旅日記などの資料を読むことができます。旅日記に記録された各地の様子は地域学習の教材としても有効です。
- ・このほか古文書基礎講座のテキストも一部掲載しています。

*** 資料小展示の解説シート**

- ・月替わりの館蔵資料の展示です。毎回バラエティーに富んだ視点から資料紹介をしています。
- ・参照：「授業素材としての月間小展示紹介」（山本明史、『山口県文書館研究紀要』第 36 号）。

*** 文書館ニュース・山口県文書館研究紀要**

- ・いずれも全バックナンバーを PDF で読むことができます。
- ・文書館ニュースで取り上げられた話題は授業素材としても有効です（各号の詳細な目次もあります）。

*** 閲覧提供できる資料の、大きな検索用データベース**

- ・キーワードを入力することにより簡単に資料（約 25 万点）の検索ができます。

*** 豊富な画像資料**

- ・絵図・絵はがき・写真・ポスター・リーフレットなど授業で効果的に使える画像（12,000 点以上）が豊富にあります。

No.196 「仮名書き絵入り往生要集」(浄土信仰)



* 教科書文庫 安政 30「往生要集 中六道物語」。「六道物語」のうち「餓鬼道」の場面です。生前の所業の報いに応じ、餓鬼道に落ちた亡者の姿が様々に描かれています。



* 教科書文庫 安政 31「往生要集 下極楽物語」。聖衆来迎図です。臨終に際し、阿弥陀如来を中心に沢山の仏が迎えに来て、極楽浄土へ導く場面です。

【解説】

10 世紀半ば、末法思想の流行を背景にして、現世で阿弥陀仏を念じることにより来世において極楽浄土に往生できるという浄土信仰が広まりました。

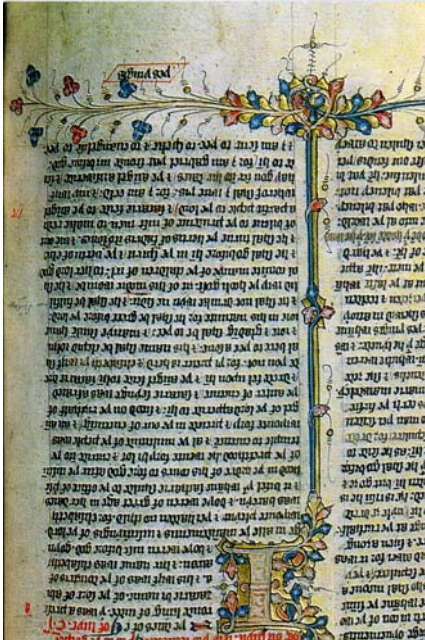
比叡山で学んだ源信は、「往生要集」の中で、多くの経文をひきながら、念仏による極楽往生の方法を人びとに説き、浄土信仰を広めました。

以後、「往生要集」は人々を教化するのに用いられ、江戸時代には便利な絵巻が作られました。さらに、仮名書きで挿絵の「仮名書き絵入り往生要集」も刊行されました。

「仮名書き絵入り往生要集」は、「往生要集」巻上のうち第1「厭離穢土（おんりえど）」と第2「欣求浄土（ごんぐじょうど）」を、上巻「地獄物語」・中巻「六道物語」・下巻「極楽物語」の3巻にして収録しています。当館では中巻と下巻を所蔵しています。

「往生要集」は、人びとに地獄の恐ろしさを植え付けるとともに、極楽往生へのあこがれを強烈に抱かせました。こうして、人びとの来世のイメージが形作られていきました。

No.197 聖書



* 和田敏英収集史料 386(14 の 13)
④「絵葉書」(ヘレフォード大聖堂<
図書館・サイダー聖書>)

【解説】

キリスト教の聖書は、イスラエルの民と神との契約を記した旧約聖書と、主としてキリストとその弟子たちの活動を綴った新約聖書から構成されています。

聖書の位置付けは教派によって異なっています。たとえば、カトリック教会では聖書は聖伝と並列するものですが、正教会においては、聖書は聖伝の一部と位置づけられています。また、プロテスタ

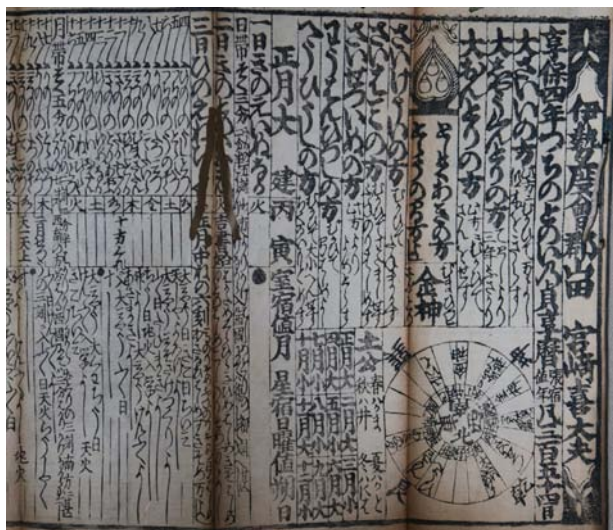
ントにおいては、聖書のみが重要な教理とされています。

なお、聖書はかつては一部の聖職者だけのものでしたが、15 世紀半ばにゲーテンベルクが活版印刷による聖書を出版して以降は、一般にも広く普及しました。また、翻訳も盛んに行われ、聖書は全部または一部が世界 3,200 以上の言語に翻訳されています(2017 年現在)。発行部数には諸説ありますが、世界一発行されている本としてギネスブックに登録されています。

写真は、英国のヘレフォード大聖堂図書館に伝わる「サイダー」聖書です。同国の神学者、翻訳者であり、宗教改革の先駆者と評価されるウィクリフ(?～1384)によって翻訳された「新約聖書」のルカによる福音書の冒頭部分で、酒という意味で「サイダー」という言葉が使われています。

* 当館蔵の「新約全書」(木梨家文書 669・670)は、明治期に刊行された小型版の新約聖書です。

No.198 江戸時代の暦（伊勢暦）



* 小田家文書（柳井市金屋）護符 896「伊勢暦」

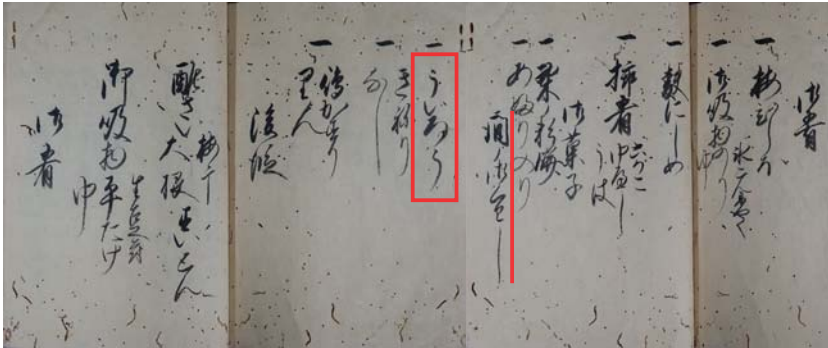
【解説】

写真は、初めて日本人（渋川春海）によって編纂された暦である貞享暦（1685〔貞享2〕年に宣明暦から改暦）に基づく伊勢暦です。伊勢暦は伊勢の御師（おんし。伊勢神宮へ参詣者を案内し、参拝や宿泊の世話をした）が伊勢神宮の御神札とともに配ったことから、全国に広がっていきました。右から暦の発行者（伊勢外宮崎喜大夫）、年号と日数、八将神や歳徳神の方角や吉凶、月の大小に続いて、正月から各日の日にち・干支・十二直（その日の運勢）・納音（なっちん。干支を木火土金水の五行に分類した運勢）・節・吉凶などの記載が続きます。

江戸時代の和暦は貞享暦以後も宝暦暦・寛政暦・天保暦と続き、1872（明治5）年まで使用されましたが、いずれも太陰太陽暦で、暦日は月の満ち欠けに基づいていました。季節の運行とのズレが生じるため、閏月が挟まれる年もありましたが、農業等はいわゆる二十四節気（太陽暦由来の、季節の変わり目となる日）や雑節に基づいて行われました。写真の正月三日にみえる「正月中」（雨水）や正月十八日の「二月せつ（節）」（啓蟄）などがそれにあたります。

* 当館の小田家文書（柳井市金屋）には、写真にみえる1719（享保4）年から1867（慶応3）年にいたる82冊の伊勢暦があります。

No.199 外郎（郷土菓子）



* 毛利家文庫 2 柳営 41 (40 の 20) 「慶安承応御国目付並寛文巡見使来藩一件録」

【解説】

外郎は山口を代表する菓子です。山口のほか、小田原・名古屋・京都などが名産地としてよく知られています。山口でいつごろから外郎が作られるようになったかは、はっきりとしませんが、記録としては、1654（承応3）年に幕府の国目付が来藩した際の饗応料理の中に見えるのが初見です（写真上）。本膳から二の膳へと料理が進み、「間ノ御くわし（間の御菓子）」として「うしろ」が出されています。

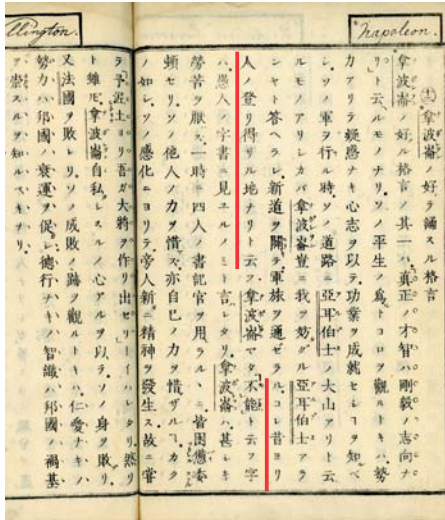
山口の外郎はわらび粉を用いる点に特徴があります。承応3年の記録の中にも食材として「わらびのせん（でんぶん）」があげられており、当時から山口の外郎にはわらび粉が用いられていたのではないかと考えられています。

江戸時代、外郎は大内御堀（山口市）の福田屋で生産され、萩藩で重用されました。* 田村哲夫文庫 1237 「名さらに明治以降も人々に愛されました。



* 菓子としての「外郎」が有名となる前に、「外郎」という名の薬がありました。元朝で員外郎という官職についていた陳順祖が来日し、その子孫が代々、陳外郎（ちんうしろ）と名乗り、多方面で活躍しました。医術にもたけ、「透頂香（とうちんこう）」という丸薬を調合したことで有名となり、この薬が別名「外郎」と呼ばれました。

No.201 ナポレオン



* 文書館図書 375「西国立志編 第6冊」

【解説】

写真は幕末・明治期の啓蒙思想家、中村正直が訳した「西国立志編」です。原書はイギリス人スマイルズの「Self Help（自助論）」で、「天は自ら助くる者を助く」の話から始まっています。西洋の歴史上の人物の成功譚を数百人分載せたいわゆる自己啓発本で、福沢諭吉の「学問

のすゝめ」とともに明治初期の青年たちに大きな影響をあたえました。

この本では政治家・軍人・学者・発明家など様々な分野の人が取り上げられ、ナポレオンについても様々なエピソードが紹介されています。

「剛毅」について論じた部分では、「不能ト云フ字ハ愚人ノ字書ニ見ユルノミ」という彼の格言を紹介し、その意思の強さを評価しています。その一方で、ナポレオンには私心があったため、結局は身を滅ぼしたのだとしています。そして、ナポレオンを破ったイギリスの軍人・政治家であるウェリントンに真に国民を愛した人物として高く評価しています。

* 写真下の「仏郎王歌（フランスおうか）」は、江戸時代後期の儒学者頼山陽がナポレオンを歌った詩です。山陽は1818（文政元）年の長崎遊学の際にはじめてナポレオンのことを知り、詩にしました。著名な学者であった彼のこの詩は、ナポレオンの名を日本に大いに広めました（吉田樟堂文庫 679「頼山陽詩集」）。

佛郎王歌
佛郎王 王起何處大西洋。太白鐘精眼碧光。天付韜略鑄其腸。蠶食歐
邏東拓疆。誓以崑崙爲中央。國內遊手收編行。兵無妻子武趨趨。縮挺
爲銃伸爲槍。銃退鎗進巨撞撞。所向無前血玄黃。獨有邪羅相頰頰。潛
遣謀賊懷劍鋒。王覺故與之翱翔。能刺刺我不能亡。汝主何不旗鼓當。
遣客即發陣堂堂。絨旗蔽天日無芒。五戰及國我武揚。邪羅如魚泣釜湯。

No.202 蒸気機関車 (SL)



* 和田敏英収集史料 144
「山口線の蒸気機関車」

【解説】

湯を沸かして発生する蒸気の力を利用する蒸気機関車 (SL) は、産業革命が進行中の英国で誕生しました。

1804 年、英国のトレビシックが作製し走らせた SL が史上最初のものでされています。その後、SL はスチーブンソンらによって改良され、1825 年に「ロコモーション号」がストックトン・ダーリントン間を走行しました。これが、公共鉄道を走った最初の SL です。

さらに、1830 年に開通した、本格的な鉄道であるリバプール・マンチェスター鉄道をきっかけに、世界は SL 鉄道時代に突入しました。英国について本格的な鉄道時代を迎えたアメリカでは、東海岸から西海岸までの大陸の横断に幌馬車で数ヶ月を要していたのが、数日で大量かつ確実に人や物を運ぶことができるようになりました。

欧米諸国より約 40 年遅れた 1872 (明治 5) 年に、日本では新橋・横浜間で最初の鉄道が開通し、当時陸蒸気 (おかじょうき) と呼ばれた SL が走りました。国産の SL が誕生したのは、さらに 20 年後の 1892 (明治 25) 年のことで、それ以来、欧米で開発された技術を取り入れた SL が作られました。山岳地帯と海岸沿いの平地を併せ持つ日本は、多種多様な SL を国産した世界でも数少ない国であり、昭和に入ると日本の SL 技術は欧米とくらべてもそう見劣りしない段階まで到達しました。

写真は、国鉄 (現 JR) 山口線を走る SL です。山口線では、SL は 1973 (昭和 48) 年に姿を消しましたが、1979 (昭和 54) 年に観光列車「やまぐち号」として復活し、現在も根強い人気があります。

No.203 安政東海地震・安政南海地震



【解説】

* 毛利家文庫 29 風説 41 「美々婦久路」

1854（嘉永7・安政元）年，駿河湾・遠州灘・熊野灘の海底を震源域として推定マグニチュード8.4の巨大地震が起こり（安政東海地震），つづけて，約30時間後には紀伊水道から四国沖の海底を震源域とする巨大な地震が起こりました（安政南海地震）。これらは南海トラフを震源域とした地震（南海トラフ地震）と考えられています。南海トラフ地震は概ね100～150年間隔で繰り返し発生しており，安政のものは1707（宝永4）年の地震に続くものとされています。1946（昭和21）年に南西日本一帯で起こった南海地震もこれにあたります。

写真は1854年の地震の近畿以東の状況を記した木版画です。燃え盛る街並みや津波で激しく揺れ動く船の様子が生々しく描かれています。

山口県内でも，この地震の記録が多く残されています。それによると，高札場の玉垣の破損，石灯籠の倒壊，干拓地の土手の破損，瀬戸内海沿岸では液状化現象が起きています。さらに180cmほどの津波も報告されています。

* 当館では平成25年度に「山口県災害記－過去の記録に学ぶ－」をテーマにした第8回アーカイブズウィークを開催し，地震・台風・高潮・水害・土砂災害など当館の記録に残る災害を紹介しました。展示解説資料はこちら。http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/user_data/upload/File/pdf/aw2013ex.pdf

No.204 天然痘と種痘



* 小田家文書（山口市吉敷）245

「善那（ジェンナー）氏種痘発明百年記念会報告書」

【解説】

天然痘（疱瘡）は、史上最も人類を苦しめた伝染病のひとつです。

一度かかったら再びかからないことは知られており、古くから中国などでは天然痘患者の膿（うみ）や痂（かさぶた）を健康な人に接種して軽度の天然痘を起こさせて免疫を得る「人痘法」が行なわれていましたが、安全性が充分でなかった等で普及しませんでした。

1796年にイギリスの医師ジェンナーが、ウシが感染する牛痘の膿を用いた安全な「牛痘法」を考案すると、これが世界中に広まりました。日本でも1849（嘉永2）年6月に佐賀藩がオランダ商館医モーニッケを通じて牛痘苗を輸入し、長崎で種痘に成功してから諸藩で普及し始めましたが、幕府の対応は遅れ、江戸ではようやく1858（安政5）年に伊東玄朴ら蘭方医の努力によって「お玉ヶ池種痘所」が開設されました。

当時の種痘は、上の写真のように、善感（種痘の効果が現れ、免疫を生じた状態）した子どもから種を取り（取苗）、植え次いでいく（伝苗・種苗）ものでした。

* 天然痘に対する人々の恐れや祈りは、当館に所蔵されている数多くの資料によってうかがえます。第11回アーカイブズウィーク解説シートおよび平成27年度月間小展示の解説資料をご参照ください。

<http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/index/page/id/676>（「10 疫病と疫神」）

<http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/index/page/id/617>（第6回解説資料）

No.205 近代のおとずれと城跡



* 吉田樟堂文庫 2706 「萩城五層楼写真」

【解説】

廃藩置県による大名の東京居住にともない、それまでの城館は空屋状態になっていました。1873（明治6）年1月の「廃城令」（「全国城郭

存廃ノ処分並兵營地等撰定方」）により、「武士の世」の象徴であった城郭や陣屋が正式に廃止されることになりました。

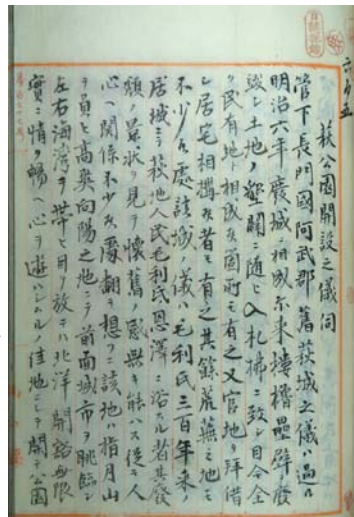
姫路城や彦根城など、歴史の証徴として文化財的に保存されることになったものもありましたが、多くの場合、天守や櫓などの豪壮な建造物は取り壊され、水を湛えた濠と堅牢な石垣に取り囲まれた広大な敷地のみが往時をしのばせる故地となりました。

城跡は、陸軍の師団設置場所に転用されることがしばしばでした。時代は変われど、軍事拠点として引き継がれていったのですが、一方で民衆に開かれた空間へと変貌を遂げる場合もありました。

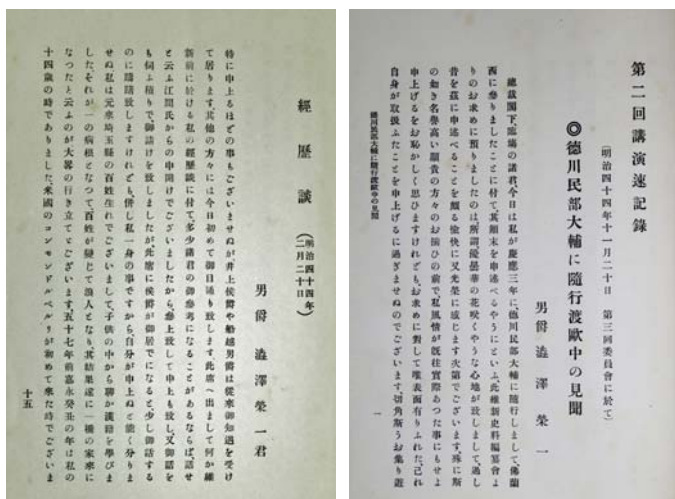
「廃城令」によって五層の天守閣（写真上）が解体された萩城跡も公園として生まれ変わることになりました。1877（明治10）年、「高爽向陽の佳地」と評された風致を取り込んだ公園開設にむけた歎願書が内務卿大久保利通宛に提出されました（写真下）。

大名の居館であり軍事的な要害でもあった場所が、新しい時代の訪れを象徴して市民を受け容れる空間へと変貌を遂げることになったのです。

* 明治期政府布達類 214 「内務省指令録」。
1877（明治10）年9月、県令関口隆吉から提出された「萩公園開設嘆願書」。



No.206 渋沢栄一



* 毛利家文庫 76 速記類 56 「温知会講演速記録」(15の1)

【解説】

渋沢栄一（しぶさわ えいいち）は1840（天保11）年、現埼玉県深谷（ふかや）市の豪農に生まれ、尊皇攘夷・倒幕を志しましたが、京都での志士活動に行き詰まり、一橋慶喜に仕えることになりました。慶喜は1866（慶応2）年将軍となり、渋沢は翌年のパリ万国博覧会に将軍の名代として出席する慶喜の異母弟・徳川昭武の随員として渡仏し、同時にヨーロッパ各国を訪問してグローバルな見聞を広めました。

維新後、1873（明治6）年には大久保利通や大隈重信と対立して大蔵省を井上馨と共に退官、以後は実業家として第一国立銀行や東京証券取引所のほかガス・保険・ホテル・鉄道・ビール等多種多様な企業の設立・経営に関わり、また社会活動家として東京慈恵会・日本赤十字社の設立などに携わりました。実業教育や女子教育にも力を入れ、多くの大学の設立・経営にも関わりました。

写真は、渋沢が幕末期に洋行したときの様子（右）や自らの経歴（左）を語った講演の速記録です。

* 渋沢栄一と井上馨が、大蔵省を去った直後に出した政府への建言書は新聞に記載されて一般に流布したことから、事態を憂慮した政府は7月、掲示をもってそれに対抗しました（「前大蔵大輔井上馨同三等出仕渋沢栄一建言書新聞中へ記載二関シ掲示」県史編纂所史料2118）。

No.207 戦前の県内製糸業



* 御蘭生翁甫文庫 132 『山口県之蠶絲業』（昭和8年、大日本蠶糸会山口支会）。

県内の養蚕の歴史がコンパクトにまとめられています。

【解説】

生糸は、開国以降のわが国の主要輸出品として重視され、国内各地で養蚕業・製糸業の育成振興が図られました。山口県でも、技術伝習の目的で、官営模範工場富岡製糸場に子女が派遣されたほか、養蚕教師の巡回指導による生産技術の向上や、生産者の組織化による経営安定など、産業化に向けた努力が積み重ねられました。

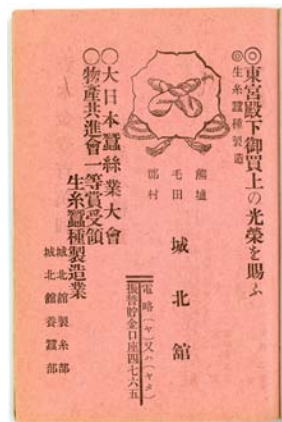
1883（明治16）年創立の萩織工会社川島製糸場では、生糸生産の先進地上州群馬での経営経験者である支配人のもと、富岡工女が技術指導にあたったとされます。収入の魅力に加え、「薄化粧に小粋な出で立ち」の上品で高尚な職種として、製糸工女は、農家の子女にとっては羨望的ともなっていました。

明治末から大正期にかけて、岩国の義済堂製糸、萩製糸、塩田村の城北館、日良居村の神崎工場、徳山製糸、大田村の松村工場など、いくつかの器械製糸工場の存在を「県統計書」で確認することができます。

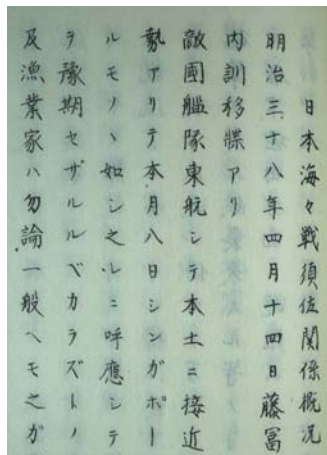
なかでも、萩出身の実業家賀田金三郎が経営を支援した萩製糸は、海外輸出を念頭においた大規模な製糸工場でした。製品の品質も横浜市場では信州の高級糸以上の評価を得たとされ、皇室への献上品にも含まれるほどでした。

糸の価格は景気変動の影響を受けやすく、基幹産業として製糸業が定着することはありませんでしたが、養蚕は、手近な農家の副業として奨励され続けました。

* 1908（明治41）年の行幸記念で刊行された『山口県案内記』（一般郷土資料B1、作間久吉編）に収録された「製糸工場城北館」の広告。



No.208 日露戦争と山口県



* (左) 県史編纂所史料 291「日本海海戦当時之油谷湾」

* (右) 県庁戦前B955「寺院仏堂」のうち、洞春寺住職荒川道隆から内務大臣宛に提出された「国宝保管所在地変更届」(明治38年6月)。

【解説】

日清戦争後の三国干渉を経て、「臥薪嘗胆」の旗印を掲げた日本。近代国家としての対外的膨張に歯止めをかける術を失ったまま、1904（明治37）年からの日露戦争を迎えます。

開戦に備えて国防の強化が図られ、県内でも、下関要塞とそれを取りまく諸砲台の本格整備に加え、沿岸部には陸軍の監視哨や海軍の望楼が築られました。写真左はバルチック艦隊参戦による海戦を目前にして緊張高まる沿海部（須佐）の様子を読みとることができる記録です。

開戦後のいくつかの衝突で勝利を得たことから、ロシア人捕虜が国内に収容されることになり、山口町内でも、菜香亭や瑠璃光寺など六か所に約500人の捕虜が連行されました。1905（明治38）年3月24日付県告諭第2号で、「博愛慈悲の心をもって敬意を表すべき」「好奇の目を向けないこと」などの内容がもりこまれた「俘虜収容の心得」が通達されました。これは1899年の「ハーグ条約」で取り決められた捕虜の処遇に関する国際協定に則ったものでした。

写真右は捕虜収容先に指定された洞春寺から内務省への申出です。寺蔵の文化財「絹本着色維摩居士像」について、不測の事態に備えて、町内野田の毛利公爵邸宝物庫への移転保管の許可を求めるものでした。異国の兵士を迎え入れることになった山口町民の戸惑いをうかがうことができます。

No.209 「地理歴史防長唱歌」



* 一般郷土史料 B379「地理歴史防長唱歌第2集」

【解説】

明治 30～40 年代、「地理唱歌」・「地理歴史唱歌」と銘打った唱歌が全国各地で作られました。

「汽笛一声新橋を」

ではじまる鉄道唱歌もその一つで、いずれも親しみやすいメロディーにのせて各地の地理や歴史が歌いこまれています。

これらの多くは、時とともに忘れ去られましたが、なかには長野県の「信濃の国」のように、現在も県民歌として歌いつがれているものもあります。

山口県でも、1901（明治 34）年に『地理歴史防長唱歌』第 1 集が、2 年後に第 2 集が作られました。郡ごとの地理や歴史が、紀行文のようなスタイルで、あたかも県内を旅しているかのような臨場感をもって歌われています。各郡 10 番前後の歌詞があり、一番長い吉敷郡では 33 番まであります。これらの歌詞からは、当時の人たちが自分たちの郷土をどのように理解していたのかが読み取れます。

第 3 集も刊行され全県が完結する予定だったようですが、第 3 集については残念ながらその存否は不明です。

* 第七吉敷郡

- | | |
|---|--|
| <p>一 郡界なる鯖山を
下れば小鯖の禪昌寺
昔は西国の高野とて
今もその名ぞいと高き</p> | <p>三 大内氏の氏寺と
栄えしかども名にも似ず
衰へ果てゝ本堂の
跡は山口農学校</p> |
| <p>二 音にきこえて鳴瀧の
泰雲寺にもたち寄りて
くれば氷上の橋近き
山手に見ゆる興隆寺</p> | <p>四 御堀の里の外郎羹
名産なればあがなひて
鰐石見つゝ鰐石橋
渡れば山口町ぞかし
(以下 33 番までつづく)</p> |

No.210 木炭自動車



* 県庁戦後 B1940 年代 310「瓦斯発生炉要図」

【解説】

戦時色が強くなると軍需優先の統制経済のため国民生活が圧迫されました。そのため、金属製品が陶製や木製で代用されたり、

衣料品ではスフ（人造綿）が登場するなどしました。

不足するガソリンや軽油の代わりに、木炭から発生させたガスを燃料としたのが木炭自動車です。写真は木炭バスで、従来の車体を改造し、車体後部に大きな木炭ガス発生装置が積み込まれていました。

木炭自動車は、ガスを発生させる準備のため出発までに時間がかかり、また、燃焼力が弱くスピードも遅いものでしたが、民間での石油使用を抑えるため、その使用が奨励されました。

戦後、統制経済が終了すると、急速に姿を消しました。

* 「漁船用木炭瓦斯発生装置二関スル件」（県庁戦前A農業 735）や「漁船用木炭瓦斯発生装置経過一件」（県庁戦前 A 農業 740）などの資料は、自動車ばかりでなく漁船の動力源としても木炭が使われたことを示しています。

No.211 日中友好の船



* 文書館図書 018「山口県文書館の30年」。1978（昭和53）年の日中平和友好条約締結を受け、翌年5月、中国から「中日友好の船」訪日代表団約600名が来日しました。山口県はその最初の訪問地となり3日間にわたり視察が行われました。当館も見学地の一つで、左の写真はその時の様子です（文書館閲覧室）。

【解説】

1951（昭和26）年のサンフランシスコ平和条約では、東陣営諸国やアジアの多くの国々との間で講和が実現せず、これらの国々との国交回復が課題として残されました。

このうち、中華人民共和国（中国）とは1972（昭和47）年の日中共同声明により国交が正常化され、1978（昭和53）年に日中平和友好条約が締結されたことで、両国の関係は深まっていきました。

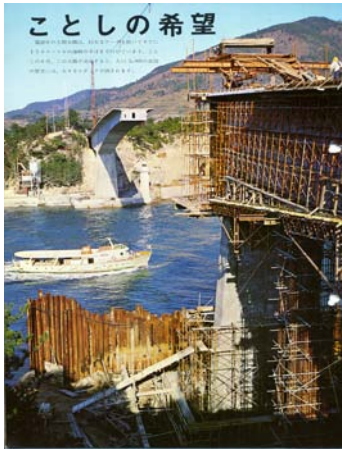
こうした動きを背景として、山口県でも中国との交流が進められました。1979（昭和54）年、下関市と山東省青島市との間で友好都市提携が調印され、翌年、提携1周年を記念して日中友好の船「ゆうとぴあ」が不定期航路として下関・青島間に就航しました。下の写真はその初航海の様子です。平井県知事以下610名からなる山口県からの中国訪問団が乗船し、9日間の日程で青島・天津・北京を訪問しました。

その後、1982（昭和57）年には山口県と山東省との間で友好協定が締結されました。



* グラフ山口 - 総務 325「日中友好の船 ゆうとぴあ（写真）」。
昭和55年10月。下関港。

No.212 道路整備と架橋



* 行政資料
60 企画 302
「グラフやまぐち
1969.1」。

建設工事が
進む上関大橋
(左)と関門
橋・笠戸大
橋完成予想
図(右)。

【解説】

高度経済成長期には道路をはじめとする身近なインフラが次々に整備されました。

写真は1969(昭和44)年1月発行の山口県の広報紙「グラフやまぐち」で、年頭の橋本県知事のインタビュー記事や、「繁栄への道を開く」「海の五橋」の見出しで、道路および橋の建設の様子が紹介されています。

道路整備では、この時期、山陽と山陰を結ぶ道路(陰陽連絡道路)の建設に力が注がれました。昭和37年に小郡一萩間が完成し、下関―長門間をはじめ5つのルートが完成間近であると書かれています。豊北―一周東間の縦貫道路、国道2号線の渋滞緩和のためのバイパス、高速道路網の整備計画も示されています。

三方を海に囲まれた山口県では、橋の建設も相次ぎました。昭和40年に青海大橋が完成、上関大橋や笠戸大橋の工事が順調に進み、本州と九州を結ぶ関門橋建設にもいよいよ着工するとしています。また県下最大の離島であった周防大島と本土をつなぐ大島大橋も調査が最終段階を迎え、本格的な設計に入る予定であるとされています。

これらの記事からは、高度経済成長期の勢いが伝わってきます。

* 架橋については「青海大橋のあらし」(リーフレット昭和40-22)、「上関大橋」(同昭和44-7)、「笠戸大橋」(同昭和45-30)、「関門橋・関門自動車道」(同昭和44-12)、「大島大橋」(同昭和47-40)などの資料があります。

No.213 「昭和 75 年（西暦 2000）」年の山口県未来予想図

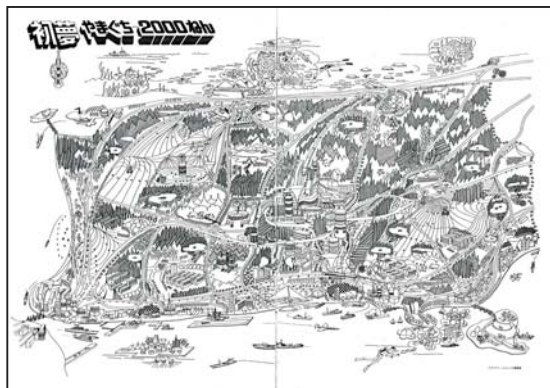


* リーフレット昭和 61-139 「やまぐち
ち 21 世紀へのはばたき グラフ山
口特集号」

【解説】

山口県は 1987（昭和 62）年 2 月、21 世紀に
向けた新しい県づくりを進めるために、昭和 75 年（2000 年）までの
長期的な見通しに立った「第四次県勢振興の長期展望」を作成しました。

写真上は翌 3 月発行の県の広報紙「グラフやまぐち」の特集号で、
長期展望で示された「県土 1 時間構想」・「オクトピア構想」・「マリン
ベルト構想」・「グリーンベルト構想」・「ハイテクベルト構想」・「高度情
報通信全県ネットワーク構想」で実現される、西暦 2000 年の山口県の
姿が Q & A 形式で説明されています。裏面の明るい未来を感じさせるイ
ラストも印象的です。バブル景気の入り口に立つ頃に描かれた山口県の
未来予想図です。



* 上の資料より 20 年さかの
ぼった 1969（昭和 44）年
1 月発行の「グラフやまぐち」
にも「初夢やまぐち 2000 ね
ん」と題し、山口の未来予
想図が描かれています。西
暦 2000 年から 20 年が経
過した現在の私たちの目か
ら 2 つの未来予想図を見
比べると、色々なことに気
づかれます（行政資料 60
企画 302 「グラフやまぐち
1969.1」）。